

西成田 豊 著

## 『日本の近代化と民衆意識の変容』

——機械工の情念と行動

勝俣 達也

本書は、経済史・労働史の領域で数多くの業績を残してきた著者によるものである。しかしながら、これまでのような客観的・数量的な実態把握をめざす重厚な歴史分析とはやや趣を異にしている。冒頭で本書の課題を「日本が明治維新（明治の革命）と産業革命（機械制工業化）による近代化によって民衆の意識がどのように変化したかという問題を、機械工の情念（意識と感情）と行動の分析をとおして究明することにある」（1頁）としているように、本書ではとくに労働者の主観的な意識が研究対象になっているからである。こうした課題の背景として、「理論」や「理性」を重視してきたとする戦後歴史学に対して、「感性」も「感情」ももった生身の民衆像を近代化との関係で描き出してみたいという問題意識が、著者自身の学問観の変化とともに述べられ、「機械工」がその具体的な分析対象として定められている。こうした著者の分析視点に関わる先行研究として、ウェーバー、民衆史、感性史（アナール学派）、渡辺京二氏、武田晴人氏の業績を検討し、本書の方法的な立場を、歴史の底辺で生きる民衆の意識や感情を掬いあげようとする「民衆史・感性史」の方法であるとしている。具体的な分析は、新たに発掘された資料というよりは、基本的な文献や諸史料の丁寧な読み込みによってすすめられる。以下、各章の概要を紹介する。

第一章「機械工の群像——勤続・渡り・独立」では、明治期から大正期の機械工たちがとりえた様々なキャリアについて分析している。具体的には、長期勤続の職工、工場を渡り歩く「渡り職工」、工場主として独立した職工について、事例から検討され、当時の機械工においては、「勤続」によって得られる地位や報酬に魅力を感じるものがある一方、他人に雇われる



● にしなりました・ゆたか 一橋大学名誉教授。

● 吉川弘文館  
2020年12月刊  
A5判・272頁  
定価9900円（本体9000円）

職工という地位に甘んじることを潔しとせず、独立することを良しとする考えが広く存在していたとされる。

第二章「工場規則」では、明治期の官民大工場における工場規則や罰則規定について分析している。当時の大工場では、就業時間中における職場からの離脱、喫煙・飲食・睡眠などの怠惰な行為、外来者との面会、通用門以外からの出入り、私品製造や道具の持ち出し等について事細かく禁止する規定が存在していたが、そうした状況に対して、著者は「個人労働の価値意識」をもって雇用労働が求める規律に容易に馴致しようとしめない職工たちの自由なふるまいに、経営側が相当苦勞していたのではないかとしている。

第三章「工場の労働」では、工場内における日々の労働の様子について、労働時間、工場内の様子、死傷・疾病、欠勤等の観点から描かれている。労働時間については、夜業・深夜業は日常的に行われていたが、あまりに働きすぎる職工は、仲間から「因業の奴」として批難されていたこと、また轟音や塵埃等の作業環境の「凄まじさ」は、当の職工たちをしても工場を「異様な世界」と認識させていたことなど、機械工たちの生きる労働世界とそれに対する認識が描かれる。また、総じて当時の欠勤率は高かったが、欠勤の理由は、怠惰や享楽、副業や家業のためといった理由が少なくなく、無断欠勤して他の工場で就労するケースもあり、契約に対する責任観念が希薄であった関係性をうかがわせている。

第四章「工場内の人間関係と人間気質」では、まず、機械工たちの上に立って、労務管理上大きな影響力をもった人々との関係について検討している。具体的には、職工たちを事実上配下として統率していた「親方」、その親方とは別に組織上の権限によって職工を指揮・監督していた「職長」（監督者）、さらに職場集団の上に位置して労務管理にあっていた「技師」との関係である。とくに職長については、その配下に対する不公平な取り扱いが機械工たちの強い怒りをもたらし、争議の一因になっていたことが確認される。また、機械工たちの気質について、第一に、同職的な仲間意識にもとづいた義理固さを持っていたこと、第二に、貯蓄意識が著しく低かったこと（江戸期以来の伝統的な職人氣質に加え、危険な労働に対する恐怖が刹那的な生と浪費を助長した）、第三に、自身に対する卑下意識や低い自己肯定感、強い転業意識について指摘されている。

第五章「遊興と文化」は、工場外における職工の生活について検討した章である。職工は、日々の労働による疲労の反動から、その慰安のための消費をしたが、その具体的な方途であった飲酒、寄席、遊郭と賭博、新聞、宗教・信仰についてそれぞれ論じている。寄席や遊郭等の遊興施設は、明治以降、大都市だけでなく横須賀や呉など官営大工場がある地方都市においても発展していたが、所謂「飲む・打つ・買う」に加え、学知には関心はないが情報には接したいという価値意識、神仏に依頼する現実的な宗教観などについて検討している。

第六章「労働争議」は、従来の労働史においても主要な分析対象であったが、著者は、労使における賃金・労働条件をめぐる闘いという点に注目するだけでは、この時期の労働争議の重要な特徴を見落とすしてしまうとする。特に第四章で見た監督者やその上の技師への不満が相当多く、苛酷な工場規則を徹底させようとした技師や、依怙最良をする監督者たちへの怒り、古参職工を優遇する・差別昇給等が争議の大きな原因となっていたと指摘する。また争議参加者の間に、義理固い仲間意識（任侠精神）が存在し、かなり組織力の高い争議形態が展開されていることにも注目すべきであるとしている。

第七章「横山源之助・鉄工組合・友愛会」は、横山

源之助および鉄工組合・友愛会といった労働団体の当時の職工に対する見解を、横山の著作や機関紙等の資料から検討している。これらは、おおよそ職工たちの義侠的な仲間意識や徳義心を理想視する一方、第四章でも触れた彼らの卑下意識に注目する点で共通している。鉄工組合や友愛会（鈴木文治）の場合は、卑下意識の背景には社会からの蔑視意識があり、それが職工の低い自尊心や無軌道な生活・労働をもたらすとされている。「前期」友愛会は、そうした状況をヒューマニズム精神にもとづき批判しつつ、修養や自己改造によって克服しようとする立場であったが、「後期」になると「労働者の自己肯定感」が階級としての自覚（団結）へと展開し、さらに労働組合設立論へと発展し、「労働者の階層脱出志向の消滅と雇用関係意識の精神的内面化が進んでいった」（233頁）とされる。こうした友愛会の主張の変化の背景には、第一次大戦期の工業化の中で、賃金も上昇するなど労働者の社会的立場づけの変化があったとされる。

終章「機械工と日本の近代」では、前半で各章の要点がまとめられている一方、後半では、植木枝盛の明治維新批判をとりあげている。植木は、明治維新後、旧結合組織の衰退、民衆の貧窮、民衆の欲望増大等から、維新前には存在していた道徳が退廃した状態にあるととらえていた。つまり、上述のような職工たちに対する蔑視を生み出した社会のほうも、道徳的な危機を抱えた状況にあったことを、当時の知識人の時代評価から指摘している。

さて、以上の要約をふまえて、若干のコメントを記してみたい。評者が本書の前半を読みながら念頭に浮かべていたのは、社会史の影響を受けた国内外の労働史ないし労働民衆史の成果であった（たとえば、19世紀から20世紀初頭のアメリカにおいて、近代的な労働規律に容易に適応できなかった移民たちの様子を論じたH.ガットマンの著作など）。評者は、近代日本を対象として、工場労働に適應する人々の労働・生活に着目した研究がほとんど存在しないのは史料の制約ゆえと思っていた。しかし、著者が指摘するように、これまでは研究史上の特定の文脈のみを意識するあまり、こうした社会史的な観点から基本文献・資料を十分吟味してこなかったという状況もあったかもしれない。『職工事情』をはじめとしてとりわけ明治期に書

かれた基本文献・資料には、前近代的な労働・生活習慣および価値意識の根強さやその近代化への適応の様子が生き生きと描かれていることを、本書は改めて教えてくれている。

もう一つ気になる点は、本書後半の内容と先行研究の関係である。四、六、七章で指摘されている監督者への不満、労働者たちの卑下意識やその克服といった論点は、これまでの労使（資）関係史の研究領域や、T. C. スミスのような社会史的研究においても重要な論点とされてきたところである。こうした先行研究に対して、本書の「民衆史・感性史の方法」による分析はどのような意義を持つのだろうか。ここでは、本書と上記のスミスの分析における力点の違いについて述べておきたい。まず、卑下意識や蔑視意識の問題について、本書では、「個人労働意識」の価値観にもとづいた「雇われている」状況に対する自己肯定感の低さに原因をもとめ、さらに工場の世界の「異様さ」に対する自他の差別意識があったと説明されている。一方、スミスの場合は、近世身分社会には存在しなかった職工が、社会的な義務や名誉から遠い存在として蔑視されたという社会の道徳状況から説明されている。また、職工たちが卑下意識を克服していくプロセスについては、本書では、機械工たちが労働（者）の社会的な存在意義にこだわりながら、それを階級としての自覚へと展開させていく自己意識のあり方が描かれており、その背景には大正期における賃金上昇や工場労働

の社会的な位置づけの変化があったとされている。これに対し、スミスの場合は、彼らが「人格」という概念を媒介にして自らの社会的地位の道徳的な意味付けを行っていかうとする内的な論理や、その戦略的な意図の説明に重点が置かれる。総じて、本書の場合、労働者の意識や感性をそれとして記述しつつ、その背景にある労働者の経済的な存在様式（に対する彼ら自身の自己意識）と関連させてとらえていかうとするのに対し、スミスの場合は、労働者の存在をめぐる道徳的な意味づけや論理の内在的な分析が重視されているのである。

本書が「民衆史・感性史の方法」によって丹念に描き出した歴史記述は、それとして貴重なものであり、またこれまでの労働史が正面から行ってこなかった挑戦的な試みである。一方、それが先行研究との関係で何を明らかにしているのかは、「筆者の問題意識がブレることを避けたかった」（252頁）ということもあり、必ずしも明示的に記されてはいない。この点、方法論としては、安丸良夫らの民衆思想史とマルクス主義の影響を受けた戦後歴史学との関係をふまえた本書の方法の位置づけが、また具体的な分析としては、上記のような同様の論点を扱ってきた労働史・社会史の成果との距離が、やはり気になってくると思われた。

かつまた・たつや 専修大学人間科学部准教授。社会学専攻。